

大賞 ホー・ツーニエン

【贈賞理由】

ホー・ツーニエン氏は、植民地時代の記憶、多様な言語・宗教・文化の交錯など、東南アジアを中心とする複層的な歴史を深く掘り下げ、亡霊や妖怪、虎、スパイといった現実と虚構の間を往来する存在を通して、アジアの文化的アイデンティティの多様性を探究してきた。既存映像のアルゴリズム編集、3Dアニメーション、バーチャル・リアリティ、AIなどのテクノロジーを駆使し、映像、音響、言葉が絡み合う空間に観客を没入させるインスタレーションは、映像展示の可能性を大きく拡張している。その空間構成の巧みさは、演劇作品においても卓越しており、多層的に構築された空間に異なる時間や空間を共存させる。現代美術、演劇、映画領域を横断するホー氏の視点は、キュレーションの分野でも高く評価され、第7回アジア・アート・ビエンナーレ（2019年）での共同キュレーション、第16回光州ビエンナーレ（2026年）芸術監督などにも繋がっている。

1976年シンガポール生まれ。オーストラリアのメルボルン大学で美術を専攻し、シンガポール国立大学で東南アジア研究の修士号を取得。2011年ヴェネチア・ビエンナーレシンガポール館代表をはじめ、光州ビエンナーレ、あいちトリエンナーレ2019など国際芸術祭に参加。演劇分野でも世界演劇祭（ドイツ、2010・2023年）、オランダ演劇祭（アムステルダム、2018・2020年）などに参加。2024年CHANEL Next Prize、2025年Art Basel Established Artist Awardを受賞。

代表作『東南アジア批評辞典』（2017年～）では、オンラインプラットフォーム上の画像や動画をアルファベット26文字に基づく概念でアルゴリズムが分類し、再生のたびにストーリーが更新される。この構造はひとつの作品にほぼ無限の可能性を与えると同時に、歴史や物語の書き換え可能性というホー氏の中心的な主題を体現している。また『旅館アポリア』（2019年）では、京都学派の哲学者や、シンガポールに軍報道部として滞在した映画監督・小津安二郎の視点を編み込みながら、戦時下のイデオロギーに宿る二重性と矛盾を解き明かした。本作は日本とアジア諸国の歴史的関係性を批評的に再考する重要な機会をもたらしている。

世界情勢が混迷する今日、アジアとは何か、アジアにおける日本とは何かという根源的な問いに多角的かつ可変的な視点をもたらすホー・ツーニエン氏は、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。